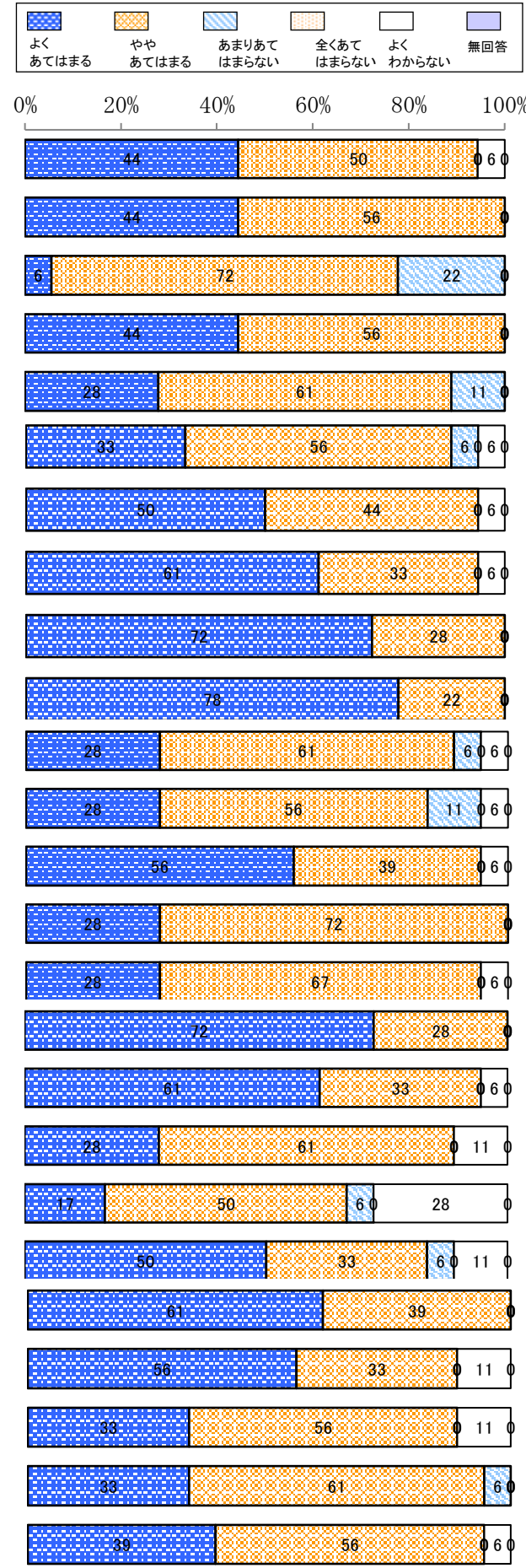


アンケートの結果			上段：児童 下段：保護者等 グラフ：教職員						
			A	B	C	D	よく分らない	無答	
学校全体の様子	1	教育目標・方針	53 38	28 55	7 6	1 0	11 1	0 0	
	2	児童・生徒の様子	68 43	24 53	3 3	3 1	2 0	0 0	
	3	基本的生活習慣	58 22	33 64	7 9	1 2	1 3	0 0	
	4	児童・生徒理解	39 46	43 46	11 6	3 0	3 3	0 0	
	5	健康・安全・安心	66 42	20 52	7 4	5 1	2 0	0 0	
学力向上の取組	6	分かる授業	53 41	32 46	11 3	2 0	3 11	0 0	
	7	個に応じた指導	59 27	33 54	7 6	1 0	0 13	0 0	
	8	学習習慣	71 30	21 55	5 8	1 1	1 5	0 0	
	9	情報教育	73 54	20 39	5 1	0 1	2 4	0 0	
	10	学校図書館の活用	65 67	26 28	5 3	1 1	2 1	0 0	
社会性・人間性の育成	11	人権教育	71 25	25 51	2 6	1 1	1 17	0 0	
	12	道徳教育	53 27	32 55	10 4	2 1	4 12	0 0	
	13	教育相談	51 20	23 60	12 3	8 1	6 16	0 0	
	14	人間関係づくり	73 63	22 35	3 1	1 1	1 0	0 0	
	15	自治的な活動	68 54	22 39	7 4	2 0	1 3	0 0	
保護者・地域との連携	16	情報発信	61 53	21 42	4 4	2 1	12 0	0 0	
	17	相談への対応	63 44	25 44	7 8	3 0	3 4	0 0	
	18	学校への参加	48 48	28 46	13 4	4 1	7 1	0 0	
	19	地域との連携	33 31	23 40	16 5	14 1	15 23	0 0	
	20	意見の反映	54 26	29 44	1 6	3 1	13 23	0 0	
各学校の特色ある教育	21	読書教育	67 66	21 27	7 3	3 0	2 3	0 0	
	22	ICT活用	61 34	24 41	8 6	2 3	4 16	0 0	
	23	体力向上	69 31	18 39	8 12	4 0	1 18	0 0	
	24	情報活用能力	66 39	26 44	3 6	1 0	4 11	0 0	
	25	異学年交流	58 32	29 49	6 4	1 1	6 14	0 0	

無効票を除く(%)



無効票を除く(%)

学校の自己評価（考察）

児童は全体の80%以上が教育目標・方針を理解していることが分かる。一方で10%の児童が分からないと答えていることも分かった。本校の教育活動の多くの場面で「チャレンジする子」という目標を今後もしっかりと掲げられていくことが必要と考えられる。

児童も保護者も教職員も、90%以上が肯定的な評価をしている。特に児童は全体の約70%が「よくあてはまる」と評価している。これは、本校で児童の興味関心を喚起する授業が実践されていることや、より良い人間関係が築かれ楽しい教育活動が実践されているからであろう。今後も児童にとって有意義で楽しい教育活動を計画・実践していく。

約90%の児童が肯定的に評価している一方で、約10%の保護者や約22%の教職員はあまりあてはまらないと否定的に評価している。特に挨拶については、消極的な実態がある。この実態は数年継続しているため、今年度の反省を生かして、今後も継続して挨拶活動の充実を図っていく。

約82%の児童や約90%の保護者が肯定的に評価している。今後も児童のよさや努力しているところを認め温かな声掛けと指導を行っていくとともに、否定的な評価の児童は話を聞いたり、声をかけたりするなど、さらなる児童理解を進め、自己肯定感を向上させる指導・支援を考える。

約90%の児童、保護者が肯定的に評価している。これは、今までの本校の健康教育、安全教育、防災教育が充実している結果であると考えられる。一方で教職員からは施設設備の老朽化からくる心配の声も上がっている。今後も児童が健康で安全に学校生活を送ることができるように、教育活動を展開していく。

80%以上の児童や保護者が肯定的に評価している。これは、本校の日々の授業が充実している結果であると考えられる。今後も日々の教材研究やOJTを通して教員の授業力を向上しつつ、ICT機器も活用し、児童にとって楽しく分かる授業を実現していく。

「分かる授業」の項目と同様に、87%以上の児童が肯定的に評価している。これは、本校の算数学習態度別少人数指導や寺子屋等の個に応じた指導の効果の表れであろう。否定的回答の児童は昨年度より減少した。今後も何にまずい悩んでいるのか判断し、個別指導を進めていく必要がある。

約92%の児童、約85%の保護者が肯定的に評価している。どの学年も家庭学習の連絡を学級だよりや学年便りをスクリーンで配信し、家庭と連携して共に学習習慣の定着を図ろうとしているからであろう。今後も家庭との連絡を密にとり、学校と家庭で連携して児童の学習習慣の定着を図っていく。

児童、保護者とも約93%、教職員は全員が肯定的に評価している。これは、昨年度以上に各学年の日頃の授業において、タブレットPCや電子黒板等のICT機器を活用している結果である。また、家庭への持ち帰りを行ったこともあり、保護者の周知へつながった。教職員の実践をもとにした事例研修、日常の授業におけるさらなる効果的な活用方法を探り、実践を公開していく。

約90%の児童、約95%の保護者が肯定的に評価している。教職員においても全員が肯定的に評価している。この結果から、児童は学校図書館を十分に活用していると言える。今後も児童が楽しく、また役に立つ学校図書館であるよう、学校司書と連携して環境整備や読書活動の充実を図っていく。

約85%の児童が肯定的に評価している。日頃の教育活動はもちろんのこと、道徳地区公開講座の場で人権教育の実践を参観してもらうなど、保護者に説明、参観してもらう場を作っていく必要がある。

82%以上の児童、保護者、教職員は肯定的な評価をしている。しかし、各学年に数名が否定的な評価をしている。対話を通して多面的・多角的に理解ができるようにし、青年期に向かう児童の心の成長に有効な道徳教育を充実させる。

約73%の児童、約80%保護者が肯定的に評価している。一方で16%の保護者の方が「よくわからない」と回答している。今後も、時間や場所を工夫して、一人ひとりが安心して教職員に相談できる環境を作っていくとともに保護者の方に対して説明をし、児童にとってより安心した学校生活が送れるよう努めていく。

約94%の児童や約98%の保護者が肯定的に評価している。今年度も制限がある中で、昨年度の実践を生かした形式を変えて体験活動や交流活動を実施した。今後の社会状況にもよるが、保護者や地域の方々の理解を得ながら、特色ある学校行事、体験活動を計画し、児童のより良い人間関係を構築していく。

約88%の児童が肯定的に評価している。制限がある中で、児童が自発的・自治的に進める活動を工夫して計画し、特別活動の充実を図っていく。

約90%の児童や保護者が肯定的に評価している。これは、スクリーンで随時配信される学校便りや学年便り、スクリーンと学校メールの併用で情報の正確な配信、学校掲示板やHPが機能しているからであろう。今後も児童や保護者地域の方にとって適切でわかりやすい情報を提供していく。

85%以上の児童、保護者が肯定的に評価している。今後も教職員はどんな時にも児童の思いをしっかりと受け止め、的確に対応していく。

約76%の児童は肯定的に評価している。保護者も約94%が肯定的に回答し昨年度から大きく伸びた。昨年度と比べると限られた場面や場所ながら授業や行事の公開ができたからだと考えられる。次年度も状況を鑑みながら保護者や地域の方が参加できる活動を公開していく。

約55%の児童と約70%の保護者は肯定的に回答している。地域行事はまだ制限のあるものが多い影響で分からないの回答も20%程度ある。本校は地域の関わりが深く、また、地域の方々も大変協力的である。児童にとって有意義な体験になるよう、今後も地域の方々と一緒に活動していく。

今年度も教育活動の制限が多かった。今後も保護者や地域の方のご意見や要望を受け止め、感染症の状況を鑑みながら児童の成長にとって、より良い教育活動になるよう改善に努めていく。

約90%以上の児童、保護者が肯定的に評価している。これは、保護者の方々も読書ボランティアとして本校の読書活動推進のために協力していることも大きく影響している。今後も、学校司書や保護者の方と連携しながら、特色ある本校の読書活動の充実を図っていく。

約80%の児童、保護者が肯定的な評価をしている。一方で約15%の保護者が「よくわからない」と回答している。ICT機器を使い何ができたかということも伝えていくとともに、長期休業中には電子書籍の活用、タブレットパソコンを活用した宿題等を出していくことも行っていく。

約85%の児童が、肯定的に評価している。運動を楽しむ場としての学校が果たす役割は大きい。昨年度は制限も多かったが、今年度は制限もほとんどなくなり、体育の授業や休み時間の活動を行うことができた。今後も工夫して計画・実践していく。

約90%の児童、80%の保護者が肯定的な評価をしている。一方で約10%の保護者が「よくわからない」と回答している。学校と家庭が連携していく必要がある。

昨年度は行うことができなかった異学年交流を再開した。約85%の児童、80%の保護者が肯定的な評価をしている。活動には制限がある中でも、高学年がリーダーシップを発揮する場面が多く見られ、異学年で楽しく遊ぶことができた。次年度も工夫しながら活動を計画していく。

